

令和8年度 学校経営方針

1 実態把握

(1) 国・県・市が進める教育

* 下線は校長による

u003c/divu003e

国	<p>第4期教育振興基本計画(令和5年度～令和9年度)の推進</p> <p>1 <u>持続可能な社会</u>の創り手の育成</p> <p>2 <u>ウェルビーイング</u>の向上</p> <p>(1) グローバル化する社会の持続的な発展に向けて<u>学び続ける人材</u>の育成</p> <p>(2) 誰一人取り残されず、全ての人の可能性を引き出す<u>共生社会</u>の実現に向けた教育の推進</p> <p>(3) <u>地域や家庭で共に学び支え合う社会</u>の実現に向けた教育の推進</p> <p>(4) 教育デジタルトランスフォーメーション(DX)の推進</p> <p>(5) 計画の実効性確保のための基盤整備・対話</p>
県	<p>静岡県教育振興基本計画(令和7年度～令和10年度)の推進</p> <p><基本理念></p> <p>未来を切り拓く人材の育成と社会を生き抜く力を育む教育の実現</p> <p><基本方針></p> <p>1 未来を創造する力を育む教育の推進</p> <p>○自ら課題を的確に捉え、解決につなげる能力とともに、時代の先を読みつつ、新しいことに貪欲に挑戦し、新たな価値を創造できる力を育む教育の推進</p> <p>○グローバルな視点と郷土に対する愛情を持って静岡県に貢献する人の育成</p> <p>2 全ての人の学びを支え 力を引き出す教育の推進</p> <p>○個々の実情やニーズに沿った多面的・総合的な支援を実施することで全ての人の可能性を引き出すとともに、社会を生き抜く力を育む教育の推進</p> <p>○多様性を尊重し、個に応じて誰もが社会の担い手として活躍できる社会の構築</p> <p>3 地域ぐるみで取り組む教育の推進</p> <p>○地域との連携により魅力ある学校づくりを進めるとともに、学校、家庭、地域等が主体的に連携し互いに学びを支え合うことにより、地域ぐるみでの教育を推進</p> <p>○誰もが生涯を通じて学び続けることのできる環境を整備し、地域社会を担う人材育成</p> <p>4 学びを支える基盤づくり</p> <p>○教職員の資質向上や働き方改革を進めるとともに、教育DXにより学びの高度化や校務の効率化等を図り、学びを支える基盤の充実</p> <p>○学校施設等の安全・安心を確保するとともに、過ごしやすい環境整備の推進</p>
市	<p>菊川市教育振興基本計画(令和6年度～令和8年度)の推進</p> <p>豊かな学びで<u>歩み続ける人</u>づくり</p> <p>1 自立した人</p> <p>○知・徳・体のバランスの取れた「生きる力」を持つとともに、<u>自ら学び、考え、行動し、失敗や壁にぶつかることを恐れず、チャレンジ</u>できる人</p> <p>2 思いやりのある人</p> <p>○生き方や価値観の<u>違いを認め合い</u>、他人を思いやる「豊かな心」を持つとともに、コミュニケーション能力に優れ、<u>互いに高め合う</u>ことができる人</p> <p>3 いつまでも<u>学び続ける人</u></p> <p>○様々なことに興味・関心を持ち、生涯にわたり意欲的に学び続け、<u>社会の変化に対応できる柔軟さや、未来を切り拓く力</u>を持ち、輝き続ける人</p>

- 1 -

(2) 本校を構成する各主体の姿

生徒	<ul style="list-style-type: none"> ○重点目標「自ら気づき→行動する」を意識している生徒が多い ○行事や部活動に一生懸命取り組む ○落ち着いた学校生活を送っている ▲悩み(学習・人間関係・家庭)を抱えている生徒が少なくない ▲自己の痛みには敏感すぎるが、他者の痛みには鈍感な生徒が見られる ▲社会へ繋げる力を伸ばしたい
保護者	<ul style="list-style-type: none"> ○教育活動に協力的である(菊東中サポーター) ○保護者同士のつながりが強い ▲時に親子関係の希薄さを感じさせられることがある ▲外国籍生徒の保護者との連携をさらに強めたい
地域	<ul style="list-style-type: none"> ○協力的で、学校のよき理解者である(菊東中サポーター) ▲少子高齢化が進み、防災面等で不安がある
校舎 教職員	<ul style="list-style-type: none"> ○校内は掲示物の充実やきれいさが保たれ、学びにふさわしい環境である ○教職員間に協力性・同僚性が見られる ○教職員の授業改善意欲が強い ▲校舎内には修繕が必要な箇所が多々ある ▲業務に対する「やめる・へらす・かえる」のさらなる意識改革 ▲持続可能な教育計画、学校行事の検討

2 令和8年度学校経営デザイン

(1) 学級数・生徒数

学年	学級数	通常学級生徒数	特支学級在籍数	合計
1年	4	114	知的11 自情5	130
2年	3	104	知的3 自情1	108
3年	3	97	知的2 自情2	101
特別支援	4		知的16 自情8	
合計	14	315	24	339

(2) 目標

ア 校訓

躍動 具体的に生き生きと行動する生徒（昭和 53 年 原文より一部抜粋）

イ 目指す学校像

在校生が、小学生が、保護者が、地域が、そして職員が
行きたい（行かせたい）学校No.1

ウ 学校教育目標

自己指導能力を身につけた生徒の育成
○主体的に問題や課題を発見し解決していく生徒
○他者の主体性を尊重できる生徒
○自分の行動を決断し実行できる生徒

エ 重点目標

自ら気づき→行動する

中学生が送る中学校生活 3 年間は、あっという間に過ぎてしまう。この 3 年間でどの生徒にとっても充実したものになりたいと考えたとき、私たち教職員が意識すべきことは、「魅力ある学校」をつくることである。「今日も楽しかった」「明日はどんなことが待っているのだろう」「早く明日にならないかな」。こんな思いが広がる学校こそ「魅力ある学校」であり、これが実現すれば、学校現場が抱える喫緊の課題は一つ一つ解決に向かっていくと信じる。

そんな「魅力ある学校」を本校では、「行きたい（行かせたい）学校No.1」と言い換え、これを目指す学校像として掲げた。では、生徒にとって「行きたい学校」とはどんな学校か。また、保護者にとって「行かせたい学校」とはどんな学校か。生徒にとっての「行きたい学校」とは、ただ遊んで楽しいだけの学校ではない。友達と本気で勉強や運動に取り組み、自分の成長をはっきり感じられる学校だと考える。生徒にとって、自分が成長できる場であり、自分の成長を実感できる場であれば、「行きたい」と思えるのではないだろうか。また、保護者にとっては、子供が成長することのできる場であれば、「行かせたい」と思えるのではないだろうか。

成長という言葉は大変幅広い。そのため、本校では、生徒の成長・つけさせたい力を社会に繋がる力と捉え、その社会に繋がる力を「自己指導能力」と定義した。全教職員が「自己指導能力とはどんなものか」をより具体的な生徒の姿として共通認識し、教育活動全体で構成してことは、生徒の成長を促すためには不可欠である。そのことを基盤とした上で、生徒の具体行動目標となる重点目標を「自ら気づき→行動する」と設定することで、生徒たちが自分の行動を意識して取り組んでいけるよう導いていきたい。

(3) 実践の4本柱（二活動二向上）

ア 自治活動

活発な生徒会活動を展開していく。生徒代表委員会から専門委員会へという生徒が中心となって活動を作っていく流れを大切にす。専門委員会では常時活動を確実に積み重ね、ステージ目標に合った特別活動を組んでいく。また、ステージに応じて重点委員会を決め、その委員会の特別活動を全校で盛り上げていく。複数委員会によるコラボ企画も活動の一つとする。

生徒代表委員会の活動として、学校生活の向上も意識的に取り組んでいく。令和6年度10月に発足した過ごしやすさ向上委員会は、校則の見直しを手がけてきた。それは、生徒の手による学校づくり推進委員会とも言えるものであった。昨年度より、過ごしやすさ向上委員会の役目を生徒代表委員会が担うこととなった。今後も、菊川東中学校のアップデートを目指し、生徒と職員が両輪で取り組んでいく。

それらを通して、自治活動を通して、「決断し実行できる生徒」の育成に努める。

イ 自己期待感向上

なりたい自分を描き、挫折しつつも前に向かって歩いていく。「自分にはやりたいことがある」「自分の将来が楽しみだ」。そんな自分に期待感をもてる生徒が増えれば、学校は活気であふれるはずだ。そのためには、「自分には良いところがある」「弱い面も含めて自分が好きだ」「自分は周りから必要とされている」という自己肯定感、自己有用感を高めていくことが重要となる。

そこで、生徒の良い表れを声に出し積極的に賞揚していく「賞揚のボイスシャワー」を校内に広げていく。その一助として、躍動賞を積極的に授与していく。さらに、個人の重点目標を大切に、ステージごと振り返りの時間をとって丁寧に行う。そこから、PDCAサイクルを生かしながら、フィードバックすることで、自分自身の取組に対する振り返り、結果に対する分析を自分事としてとらえる機会とする。そして、それまでの頑張りとこれからの意欲を確認していく。

学級経営・学年経営においても生徒の自己肯定感と自己有用感を高める行事や集会、たよりの発行に取り組むことで、自己期待感の向上を目指す。これらの取組を通して、「他者の主体性を尊重できる生徒」の育成を図る。

ウ 探究活動

「社会に繋がる力」とはどんな力か。点数取得学力もその一つかもしれないが、決してそれだけではない。探究活動の活動過程にある、発見、設定、選択・決定、まとめ、発信、自省を通して、自己指導能力、つまり、「社会に繋がる力」を鍛えたい。

そこで、総合的な学習の時間を「生き方学習ー探究活動ー」とし取り組んでいく。そこには、学年ごとの1年間の見直し、さらには、中学校3年間の総合カリキュラムを系統化することにより充実させていく。さらには、総合を軸としたカリキュラムマネジメントシートを作成し、学校全体の活動を通して充実したものとする。

また、朝活動の時間においても、コミュニケーション活動やコグニティブトレーニング（認知機能トレーニング）を取り入れながら、「社会へ繋がる力」を鍛えていく。

それら探究活動を通して、主に「主体的に問題や課題を発見し解決できる生徒」の育成を目指す。

エ 授業推進力向上

授業を推進していくのは一体誰なのか。教師が教室の前に立ち、いつも生徒をゴールに向かって引っ張っていく授業からの脱却を進めている本校の授業に当てはめると、授業者とは、生徒と言える。とするならば、今後授業推進力を高めていくべき対象は生徒である。しかし、学習すべき学年教科内容を把握している教師には年間指導計画、合わせて各教科単元の単元計画(構想)の作成が必要不可欠となる。生徒が自走する授業を目指す時、授業推進力は、教師にも生徒にも求められることになる。

教師は、評価の種類、評価のタイミングを含んだ単元構想の工夫に着手する。そこには、単元を貫く課題の吟味、個別最適な学びや協働的な学びの一体を意識した授業形態の在り方等も視野に入れる。一方、生徒は、課題解決に向け学習プログラムを作成する。自力で取り組むのかグループで取り組むのか。活用すべきはデジタルかアナログか。自己選択し、自己調整しながら粘り強く学びに向かっていく授業の実現を目指していく。

また、授業に取り組むうえで、基礎学力は必要不可欠である。今年度より取り組む朝活動の時間において、朝学習やテストの振り返りの時間等を取り入れながら、授業力推進に必要な基礎学力の定着を図る。

授業推進力向上の先には、学力(知識・技能、思考・判断・表現、学びに向かう力・人間性)向上が待っている。授業推進力向上を通して、学校教育目標に迫る。

3 勤務環境改善

(1) 勤務実態

- ア 職員の出退勤時刻の把握と管理
- イ 朝の昇降口解錠 7時 45分、部活動終了最長 16時 30分、完全下校最長 16時 45分
- ウ 計画的な 4時間・5時間授業日の設定
- エ 軽重をつけた教育課程、教育活動
- オ 計画的年休の取得

(2) 校務の整理

- ア Google Workspace の活用
- イ スクールサポートスタッフの活用
- ウ 「生活環境部」「学習環境部」の 2 環境部による教育活動の推進
- エ ガイドラインに沿った部活動運営
- オ ペーパーレスを意識したデータやたよりのデジタル化
- カ 会議時間最長 1 時間

(3) 保護者・地域との連携

- ア 生徒数減少に伴う、PTA 活動組織と内容のさらなる改編

R (年度)	8	9	10	11	12	13	14	15
全校生徒数	347	352	357	322	319	298	309	275

- イ ゲストティーチャー(GT)や地域ボランティアの活用
(園芸ボランティア 図書館ボランティア まなび隊 よりそい隊)

(4) 教職員の意識改革

ア 前年度踏襲提案からの脱却

イ 授業準備、教材研究の時間を確保するための「やめる・へらす・かえる」

ウ 一日の、一週間の業務スケジュールの作成（仕事の優先順位の決定）